

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 国語教育

桃原 千英子

2022年度の国語科教育研究では、「マルチモダリティー」「コンピテンシー・ベース」「問い」に関する研究が多く見られた。今回、その中から表現研究に関わるものを紹介する。

全国大学国語教育学会編『国語科教育』第91集(2022.3)第92集(2022.9)では、シンポジウム「文章と図像との混成型テキストの学習を支援する、メタ言語の体系的導入の試み」(奥泉香、メアリー・メッケン=ホラリック、レン・アンズワース)が開かれた。また著作『書くことの力をはぐくむマルチモーダル・アプローチ—自己認識としてのメディア・リテラシーをめざして—』(松山雅子編著、2021、溪水社)など、言語と他要素との相互作用で構築される意味に着目した研究が進められた。表現指導に関する研究では「小学生における辞書引き活動の調査—辞書媒体による検索行動の差異および辞書内容の分析—」(長田友紀・小林祐美・矢澤真人)、「語彙学習力を育成する学習指導過程の開発」(萩中奈穂美)がある。読解指導に関する研究では「「複数の自己」への寛容を目指す文学の授業実践—戯文という方法論を用いて—」(山田深雪・河上裕太)、「教材の特性を生かした「学び」の授業開発—新美南吉『ごんぎつね』を例にして—」(中野登志美)が掲載され、教師の授業観や教材観が学習者の解釈過程に影響を与えていることが示された。

日本国語教育学会『月刊国語教育研究』では、特集「感性・情緒を育む「読むこと」の単元構想」No.608が組まれた。研究では「A・シュッツの現象学から見た『夢十夜』の世界—大学生の「第一夜」の読みをもとに」(拙稿) No.602、「マンガを活用した小説学習指導の有効性の検証—葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』—」(中野登志美) No.605、「「語り指導」の実践に関する研究—『研究集録』から実践を浮かび上がらせる試み—」(中村和弘) No.608が表現学に関わるものとなっている。

表現学会『表現研究』第116号(2022.10)では、「読みの交流と自己内対話—創作単元「雪」の詩を読もう」を基に—」(上月康弘)、教科書研究の「小学校教科書に埋もれた比喩の身体性」(鷲見幸美)、「「意見の述べ方」の教育についての日中比較—高校国語教科書に着目して—」(大野早苗・莊巖)、計3本の国語教育論文が掲載された。

明治図書『教育科学・国語教育』では、特集「徹底研究「ごんぎつね」「故郷」の授業」No.873で、言葉による見方・考え方(資質・能力)となる語りや視点、比喩・象徴表現の点から、教材研究の着眼点や発問が示されている。

書評で紹介された著作『高等学校国語科授業の探究—短歌の創作・鑑賞指導を求めて—』(青木雅一、2021、溪水社)は、短歌創作を軸とした授業方法が、自立した表現者を育成することを実証した、授業探究の記録である。「教材文への短歌的接近」は、表現行為の研究として注目すべき一冊である。

(沖繩国際大学)